



地域連携センターニュース

発行 地域連携センター
電話 042-558-0321(代表)
FAX 042-550-5190(直通)

院長就任のご挨拶

院長 武井 正美



令和6年6月1日より、100年の歴史を持つ公立阿伎留医療センター院長に就任いたしました。このような長きに渡り秋川流域の医療を担ってきた歴史を持つ当センター院長に就任したことは、大変名誉なことでもある共に、その責任の重大さに身の引き締まる思いです。

私は、日本大学医学部内科学系血液膠原病内科学分野主任教授を2021年3月で退任し、根東企業長就任に伴い、非常勤の臨床顧問を拝命しておりました。その後、日本大学副学長を兼務し、本年3月31日に退任後、当センター常勤となっております。医学部の退任直前に、新型コロナウイルスパンデミックに遭遇し、命懸けで医局員の皆と対応に明け暮れました。その時に日大医学部の所在する板橋区の坂本健区長と昼夜を問わず、密に連携をさせて頂き、多大なご支援も頂き地域連携の重要性を身を持って体験いたしました。この貴重な経験を、公立医療機関としての当センターの運営に十分に生かし、当センターをご利用いただいている方だけでなく全ての秋川流域の皆様の健康と命を守るため全力を尽くす覚悟であります。

医療は、医師の働き方改革が本年4月1日より施行され、現段階では誰にも見通すことができないような大きな変換の嵐に見舞われております。東京都心では、大学からの医師の協力を得ることが困難になってきていると、5月の東京都医師会長連絡協議会で、ある地区医師会長から報告がありました。私は日本大学医師会長を拝命し3期目となっております。医師会との連携も地域医療には重要な要素の一つです。最新の医療状況をリアルタイムに掴み当センターの運営と地域連携に少しでも役に立つよう努力致します。2016年に厚生労働省が「働き方未来2035：一人ひとりが輝くために」というテーマで懇談会を開き、報告書を提出し、それをもとに「保健医療2035」提言書を公表しています。

(次ページへ続く ➡)

すでに8年弱経過し、その概要が具現化しつつあるものと考えられます。コロナ禍があり3-4年進行が遅れているのではと思いますが、その大きな方針で2035年に向け、厚生行政が進むものと理解しております。その中で「目指すべき2035年の姿」という項目があり、**i)** より良い医療をより安く享受できる。**ii)** 地域主体の保健医療を再編する。との提言がされています。後者の細目に **a)**日常生活圏での保健医療ガバナンスの強化と住民の理解・納得に基づく、地域の実情に合わせた医療サービス **b)** 地域医療構想や地域包括ケアシステムの地域主体での再編への国の支援 **c)** 地域の特性に応じた健康な地域の形成と優れた事例の国内外への共有、の3つが謳われています。まさに、公立医療機関である当センターの役割そのものでもあります。前述した **i)** のより良い医療を安くの細目は、紙面の都合もあり詳細については省略いたします。これを実現するのは、現在の国民皆保険では大変困難な目標であることは、皆様も日々実感されていることと推察いたします。根東企業長が、就任以来、全身全霊を傾けていらした医療DXがまさに花開こうとしております。この目標達成には医療DX以外の方策では皆保険の制度下においては不可能と言っても過言ではないと考えております。8000余ある日本全国の病院の中でも、現在当センターは最も導入が進んでいる医療機関の一つと考えております。

院長就任にあたり、これまで根東企業長が行ってきた先端的な医療DXの当センターでの導入活用にこれまでと同様全面的に協力し、先端的な医療を供給する公立医療機関としての新しく生まれ変わった公立阿伎留医療センターの発展と秋川流域に居住される住民や関係する方々の健康と命を守る使命を果たすこととお約束して、ご挨拶の言葉とさせていただきます。これからも、当センターへのご支援を何卒、宜しくお願い致します。

～シェーグレン症候群（病）専門外来を始めました～

令和6年4月1日より、当センターにシェーグレン症候群（病）専門外来を火曜日と金曜日午後始めております。厚生労働省指定難病となっておりますが、治療法がなく医療機関で十分な医療が提供されていない状況です。

武井正美医師は、日本大学医学部附属板橋病院血液・膠原病内科学分野主任教授を経て新たに当センターに赴任しております。武井医師は在任中より難病であるこの病気で悩んでいらっしゃる患者様と共に日本シェーグレン症候群患者の会（1986年発足）を支援するため、東京都NPOシェーグレンの会を立ち上げ（2012年発足）、現在理事長を兼務しています。ドライアイ、ドライマウスとの診断でこの膠原病が見逃されておられる方が多くいらっしゃることも事実です。厚労省指定難病の指定が認可されることで、医療費の控除も受けられる可能性を見過ごすことにもなります。また、約40%に他の膠原病の合併や約30%に慢性疼痛症/線維筋痛症が合併することも知られております。診断には、下口唇生検や唾液腺シンチが必要な場合があり、複数の診療科の協力を要します。

（次ページへ続く➡）

患者さんの主な3症状は乾燥、だるさ、痛みです。発症が更年期に重なることが多く診断が遅れる要素になっています。これらの症状が一つでもあり、原因がはっきりしない抗核抗体陽性、リウマトイド因子陽性、白血球数低下、低K血症、高ガンマグロブリン血症などで診断にお困りの場合はご遠慮なくご紹介いただければと思います。鑑別をさせて頂き、連携して診療に協力させて頂きたいと考えております。

※ 火曜午後・金曜午後になります。(事前予約制ですので、地域連携センターにお問い合わせください。予約日や時間をご案内申し上げます。)

令和5年度病診連携講演会について（ご報告）

令和6年3月5日（火）の19時30分より当院講堂にて、令和5年度病診連携講演会を開催いたしました。コロナ禍の中で長らく開催を中断せざるを得ない状況が続き、ご迷惑をおかけしました。当日は、血液内科部長（現副院長）の八田善弘医師が「多血症の鑑別と治療」、血液内科長の内野慶人医師が「診療所やクリニック等で遭遇する緊急性の高い血液疾患」をテーマに症例発表を行いました。

また、令和5年4月以降の就任医師と臨床研修医のご紹介をさせていただきました。

地域医師会の先生方、院内関係者含め約40名の皆様（WEB参加含む）にご参加いただき、ありがとうございました。

令和6年度も開催を計画しておりますので、多くの方々のご出席をお待ち申し上げます。



講演会の様子



田中匡実医師（消化器内科長）
左は樫田副院長